

『狭衣物語』から中世王朝物語への回路

—年上の母親への恋慕、その娘との結婚—

大倉 比呂志

年上の母親への恋慕とその娘との結婚という話筋は、中世王朝物語の二作品に存する。

まず『恋路ゆかしき大将』では、「はかなき琴笛の調べはさる事にて、まことしき御才のかしこく、今より世を治め給はんに誤りあるまじ」(1・16)き中宮の兄である恋路に対して、

①(恋路ニハ)そよとばかりも思し入るる御方のおはせぬを、(帝ハ)いとねたしとぞ思されける。今は、(恋路ガ)藤壺を見たてまつりてのみや、さすがに心も動かむと、(帝ガ)思し寄るは、(恋路ハ)ほほ急まるれど、……(1・20)

とあるように、帝は、前左大臣女と故院の姫宮という二人の配偶者がいるものの、その二人に深い愛情を抱いているとは考えられない恋路を動揺させようとして、最愛の藤壺女御の姿を見せ、次のごとき行動に出る。

②(帝ハ恋路ヲ)しひて召し入れて、(藤壺ノ前ニアル)御几帳をさへ押し退けさせ給ふ。……中将たち(注―入内する前に藤壺が戸無瀬入道との間で出産した息子たち(端山・花染)の歳を(考エタトコロ、藤壺ガ余リニモ若イノデ、息子タチノ母親デアルトハ)思ふにもあらぬ人の心ちして、(藤壺ノコトヲ)さすがに胸のうち騒ぐこそ、(恋路ハ)われながら憎く思ひ知られ侍れ、……(藤壺モ恋路ヲ)げにいと殊なりける人の御さまかなと、かけ離るまじう思

しぬべき心の鬼には、久しからむもいかがとおそれある心ちにてすべり入り給ひぬ。……いとどまたあくがれ添ふ事もや、さすがに心に添ひにけん(恋路ハ)家路も急がれずもの憂きままに、やがて戸無瀬の院へと思す。(1・21—22)

の二箇所にわたる傍線部のように、帝の策略が功を奏して、恋路は藤壺を見ることよって懊惱させられたのである。これは、

③(帝ハ)この大殿(恋路)を思しまとはすさま、けしからぬまでにて、世人もやう変はりたる楊貴妃にたとへてぞ申しける。(1・19)

と語られているごとく、帝が恋路を寵愛しているからこそできるわけだが、恋路の藤壺への恋慕は、

④大将(恋路)は、雪の中の(藤壺ノ)御面影、さてもと忘れがたう、常に見たてまつらまほしきこそ、我ながらなほ心弱かりけりと、深く思ひ知られ給ひける。(1・28)

⑤かの藤壺を、世に馴れぬ姫宮とも見たてまつらましかば、人に似ぬ心も忍びがたからまし、上(帝)は、さも心動かすさまならばと、御心ときめきすらんと、をかしうも人やりならず心にはかかり給へり。いかでこのけしき(注―恋路が藤壺に恋慕していること)、上の御前に見えたてまつらじ、ねたしと(恋路ガ)思ふも、……(1・29)

⑥(父ノ愛人トナツタ吉野大君トノ)かやうに乱れたる振る舞ひにつけても、(恋路ニトツテハ藤壺ノ)雪の朝は心に離れずかし。常には(帝ガ恋路ヲ藤壺

ノモトニ) おぼつかかなからぬほどに召し入れらるるにつけても、安積沼の心尽くし(注一)恋路の藤壺への物思い)はなほ苦しかりけり。(一・三七)

⑦几帳に少し外れて側み給へる(藤壺ノ)御さま、柳桜の御衣に、樺桜の御小桂奉りたる御側目、けしからぬまで若うたをやかなる御匂ひのらうたげさは、(恋路ニトツテハ)なほ忍びても忍びがたかりぬべし。(二・六三)

などと語られていることによっても、恋路が藤壺に魅了されたことが理解できよう。さらに、藤壺所生の女二宮に関して、

⑧かの雪の朝の(藤壺ノ)御面影なるものから、なほけしき異にて気高う、匂ひも光も類なき御さまは、姫宮(二女二宮)にこそはおはしますめれ。

よろづの事に騒がず鎮まる(恋路ノ)御心も、ただ今はいかがあらん、深く心騒ぎして、驚かれ給ふ。わが上の空にももの憂く浮きたつ心(注一)藤壺への恋慕)は、この(女二宮ノ)御さまなどを朝夕見たてまつらんには、慰めなんかし、さりとて当時世のつねに思ひ寄るべき御年(注一)この記事の直前に恋路の心中思惟として「十一、二ばかりにやと見ゆる(女二宮ノ)御丈立」とある)のほどならねど、ただまぼりたてまつらまほしきに、……まめだち給へる(女二宮ノ)御まみのわたり、見る我もうち笑まれて、幾千代まぼるとも飽く世あるまじきに、……

宮城野にまだうら若き女郎花(二女二宮)移して見ばやおのが垣根に(二・五一―五二)

とある傍線部によって、恋路が女二宮に魅せられたことが語られている。そのことは「ありし(女二宮ノ)御面影の身を去らぬままに」(二・五二)、「(恋路ガ女二宮ニ)いよいよ心惑ひぬべし」(二・五五)、「人目けしからずは、(恋路ハ女二宮ノモトニ)ただ這ひ寄り引き寄せぬべく、……一方ならず乱るる心や止めがたかりけん、ただすべり寄りて、御手をとらへつ」(二・六四)などという記述によっても証明され、やがて二人は結婚するのである。とすれば、そこに母から娘へという(ゆかり)の成立を見ることができただけだが、母娘を同時に恋慕してしまった恋路が語られている。

さらに『風に紅葉』において、男主人公が十三歳で元服した翌年、以前男主

人公の父親が女一宮を宮中から拉致したという事件があったために、帝は次のような発言をする。

⑨「父大臣の、雲居を分けて、この母宮(注一)帝と兄弟である女一宮。男主人公の母親)ゆゑ世の騒ぎなりしもむつかし。これをばわれと召し寄せむ」(上・一〇)

傍線部は父親のような行動を男主人公がするのを防止するために、帝が中宮所生で一歳年上の女一宮(一品宮)以下、この呼称を使用する)を男主人公に降嫁させようとする内容だが、男主人公が幼少時を回想して、

⑩この(一品宮ノ)御さまをも中宮の常にも見きこえ給はず、うとうとしきを、(男主人公ノ)大将は、などかくはおはしますぞ。心つけ顔に、上(二帝)のおぼし疑ふなるぞをかしき。思ひ寄るほどのことかは。七、八ばかりにて、童殿上して参り給へりけるをり、つくづくと目離れなく(中宮ヲ)まもりきこえ給へりけるを、上の御覧じて、「心のつかんままに、誰がためもよしなし」とて、御入り立ちははなれ給ひにけり。(上・三〇―三二)

と語っており、傍線部のごとく、帝は七、八歳の男主人公が中宮を凝視しているのを危惧して、出入りを禁止したと記されている。また、「なにがしは、幼くて、中宮をつくづくと見きこえたりけるにこそ、行く末おしはからるとて、長く御入り立ちは離れきこえたれ。……」(上・四五)という男主人公の妹である春宮の宣耀殿女御に対する発言にもあるように、中宮のもとに出入りすることを帝から禁じられたと再度語られている。さらに、結婚した一品宮は男主人公にとって「気高うなまめかしう、たをたをとうつくしう、飽かぬことなくおはしませば、御心ざしも世の常ならず」(上・一〇)とあるので、満足していると語られてはいるが、一品宮との結婚後も「(院(注一)もとの帝。以下、帝という呼称で統一する)ハ)皇太后宮(注一)もとの中宮。以下、中宮という呼称で統一する)の御あたり、例の雲居はるかにもてなざるを」(下・五八)とあるように、帝は男主人公を中宮のもとから遠去けようとしているのだ。このように、男主人公は中宮への接近を阻止されながら、その娘の一品宮との結婚生活を送るのであり、男主人公の中宮に対する恋慕は帝によって断ち切られたのだ。ここに

もまた母から娘へという（ゆかり）の関係が顕在化しているといえよう。

以上の例から、『恋路ゆかしき大将』と『風に紅葉』における恋路と主人公は、母親を恋慕した後、その娘と結婚したという点で類似しているのである。

二

では中世王朝物語に多大な影響を及ぼしたと考えられる『源氏物語』において、母親への恋慕とその娘との結婚は語られているのだろうか。

光源氏の母桐壺更衣の亡き後、父帝のもとに先帝の四宮（藤壺）が入内し、亡き母と類似している藤壺を恋慕して、やがて情事の関係に陥るが、光源氏が瘡病のために北山の聖のもとに加持の目的で赴いたところ、藤壺の姪にあたる紫上を発見し、藤壺の（身代わり）として二条院に拉致した後、結婚することになる。とすれば、これは（ゆかり）の関係として把握できよう。年上の母に該当する藤壺と姪の紫上とも肉関係が生じることになるもの、これが親子関係ではない点に、年上の母への恋慕とその娘との結婚が語られた前述の中世王朝物語の二作品とは（ずれ）を生じていることになる。また、光源氏にとつては枝葉の部分ではあるけれども、夕顔と玉鬘、六条御息所と斎宮女御（後に秋好中宮）に関しては母娘の関係で、光源氏とともに母親の方とは情事が生じたのに対して、各々の娘には恋慕するものの、情事が生じなかった点に注目すると、前述の中世王朝物語の状況とは一致しないのだ。

ところで、若菜下巻において柏木と女三宮との密通事件を光源氏が知るところとなり、光源氏から朱雀院五十賀の試案に誘われて、やむなく出かけて行った柏木は酒を強要され、「さかさまに行かぬ年月よ。老は、えのがれぬわざなり」（4・二八〇）と皮肉を浴びせられた結果、悩乱し、病に臥すわけだが、柏木巻で衰弱した柏木は親友の夕霧に後事を託して死去する。夕霧はその後、柏木の遺言に従って柏木の正妻落葉宮を訪ね、その母である一条御息所と故人を偲んで語り合う場面は次のように語られている。

①御前近き桜のいとおもしろきを、今年ばかりはとうちおぼゆるも、いまいましき筋なりければ、「あひ見むことは」と口すさびて、
時しあればかはらぬ色ににほひけり片枝枯れにし宿の桜も

わざとならず誦じなして立ちたまふに、いととう、

この春は柳のめにぞ玉はぬく咲き散る花のゆくへ知らねば

と（一条御息所へ）聞こえたまふ。いと深きよしにはあらねど、いまめかしうかどありとは言はれたまひし更衣なりけり。げにめやすきほどの用意なめりと見たまふ。（4・三三三―三三三）

①④は各々『古今集』の④「深草の野辺の桜し心あらばことしばかりはすみぞめに咲け」（哀傷・八三二・上野岑雄）、④「春ごとに花の盛りはありなめどあひ見む事はいのちなりけり」（春下・九七・よみ人しらず）によっており、④は夕霧によって一条御息所の才気が評価され、やがてその娘である落葉宮との結婚に至るわけだが、根底にはこの母親の才気に魅せられたことが原点にあるのではないだろうか。とすれば、夕霧が明確な形で一条御息所に恋慕したわけではないものの、その娘との情交に至るわけであるから、年上の母親への恋慕的なものが潜在下にあるのではなからうか。このように考えると、この記事は中世王朝物語の二作品に深層部分で脈絡するのではないのか。それが明確な形で顕現するのが、次項で述べる『狭衣物語』であると考えられる。

三

狭衣は故式部卿宮の姫君（以下、宮の姫君と称する）と結婚するわけだが、既に結婚している故一条院の娘である一品宮との関係が芳しくないために、忍び歩きの途次、故宮邸を通りかかって垣間見をする。それは以前に宮の姫君の兄である宰相中将から狭衣に妹との結婚話を示唆されていたことを狭衣が記憶していたこととも関連するものと考えられるが、

②格子の隙より火の影見ゆる所を、なほしもあらず、やをら立ち寄りて覗きたまへば、几帳どもあまた見ゆれど、押しやられなどして、奥まで見通されたり。帳の前に脇息におしかかりて経読む人、三十には足らぬほどにやと見えて、いみじうけ高う愛敬づき、見まほしきさまなど、こころ見つもる人に並ぶべくもなし。……心より外なる髪のかかり、色あはひなど、まことしうをかしげなるを、……（②4・二四一―二四二）

とあるように、狭衣は宮の姫君の母北の方に心が動き、「いとにげなう、あるまじきことかな」とは思うものの、「この見る人（北の方）をも見させて出づべき心地のしたまはぬ」（以上、②4・二四三）状態となる。さらに、

⑬夜もすがら、思はずにありがたかりつる（北の方）面影を（狭衣ハ）忘れ
たまはず、思し明かしても、かう世づかぬ心の中をも、げに知らせぬがい
と口惜しければ、……（②4・二四四―二四五）

⑭ 我もまた益田の池の浮きぬなはひとすぢにやは苦しかりける

と、言ひ消ちたまふ（狭衣ノ）けはひは、なほ聞き知らんに聞かせまほ
しきを、さま異なる御心の中をば、（北の方ハ）いかでかは知りたまはん。

（②4・二七六）

とあるごとく、狭衣の北の方に対する恋慕が語られている。狭衣が北の方に恋慕を示すようになった一因には、齋院となった源氏宮が堀川邸の八重桜を懐しんで、堀川大臣の肝入りで一条帝に入内した嵯峨院女一宮（後に中宮）に贈歌したのを堀川大臣が見て、「只今、この（源氏宮ノ）御手ばかり書く人は、誰かある。式部卿宮の上こそ名高う物せらるなれど、……」とささめきたまふに（②4・二二九―二三〇）と語った点にあるのではなからうか。すなわち、あれほどまでに恋慕している源氏宮の筆跡に遜色ない北の方であるということが父親の口から語られたのを狭衣が記憶していたからなのではあるまいか。とすれば、北の方は齋院となって俗世から離脱して手の届かない存在となった源氏宮の〈身代わり〉の役割を担っているのであり、そこに狭衣の北の方恋慕の要因が内在化しているといえよう。かつて狭衣は笛の奇瑞で天上に連れて行かれようとしたが、嵯峨帝の哀願のために地上にとどまるという結果となった代償として女二宮降嫁を示唆されたものの、狭衣は「いろいろな重ねては着じ人知れず思ひそめてし夜の狭衣」（①1・五四）の歌を詠んでいる点から、狭衣の心を占有していたのは、源氏宮の存在だったのだ。その源氏宮の筆跡に並ぶのが北の方だということを耳にしていた狭衣の気持ち北の方への恋慕に向かわせたのだと考えられる。だからこそ、

⑮これ（注―北の方）に似たまひて、今少しきびはに若からん姫君の御あり

さまは、わが思ふこと（注―源氏宮のような女性と結婚したいと思うこと）の
かなふべきにやと、うれしきをばさる物にて、……（②4・二四二―二四三）
とあるように、狭衣が宮の姫君を意識して以来、

⑯ただ、あながちなる（狭衣ノ源氏宮ニ対スル）心の中を、（神ガ）あはれと見
たまひて、かかる形代（注―宮の姫君のこと）と神の作り出でたまへるにや
と、（狭衣ガ）思し寄るにも、涙ぞこぼるる。（②4・二八一―二八二）

を始めとして、

⑰取る手もすべるやうなる（宮の姫君ノ）筋のうつくしきなど、齋院の御髪
にいとよう似たまへり。（②4・三二二）

⑱若宮（注―女二宮所生の狭衣の子で、表面上の父親は嵯峨院、「大将（狭衣）
の御方には、齋院の御前に似たてまつりたる人ぞある。宮の姫君にやあら
ん。されば、まろをば懐に夜も寝させたまはず」と、恨めしげに思して
（堀川大臣夫妻ニ）のたまふを、……（②4・三一九）

⑲「……（宮の姫君ハ）齋院にぞ、あやしきまで似たてまつらせたまへる」な
ど（大式の乳母ハ）語りて、いとめでたしと思ひきこえたるを、聞きたま
ふ（狭衣ノ母宮ノ）御けしきも、げにいとうれしげなり。（②4・三三〇）
などあるごとく、⑲は狭衣の乳母である大式の乳母の視線から、⑱は若宮
（二宮）の視線からという他者の眼から源氏宮と宮の姫君との近似性が語られ
ることによって、両者の類似性があぶり出されてくることになる。とすれば、
既に⑱で触れられているように、宮の姫君はまさに源氏宮の〈形代〉として機
能してくることになる。

ちなみに、狭衣の北の方への恋慕は源氏宮の〈身代わり〉であり、その娘の
宮の姫君も最初源氏宮の〈身代わり〉として認識され、宮の姫君はまた北の方
の〈身代わり〉の役割を担っているのであって、母娘がともに源氏宮の〈身代
わり〉であるという意味において、宮の姫君は〈身代わり〉の〈複線化〉とい
う新たな問題を背負って登場させられたのだといえよう。⁽¹⁾

四

今まで述べてきたように、年上の母親への恋慕とその娘との結婚という話筋のかすかな原形質は『源氏物語』に胚胎し、明確な形で『狭衣物語』で語られ、それが前述の中世王朝物語の二作品に影響を及ぼしたものと考えられる。『恋路ゆかしき大将』と『風に紅葉』とは『風葉集』において作中和歌が採られていないために、両作品の成立の前後関係を確定しがたいわけだが、いずれにせよ話筋のうえで、深層としての『源氏物語』、表層としての『狭衣物語』がこれら二作品に影響を及ぼしたということだけは事実であろう。とすれば、従来以上にこれら二作品に対して、表層部分における『狭衣物語』の果たした役割の大きさに注意していかねばなるまい。

* * *

引用した『恋路ゆかしき大将』『風に紅葉』の本文は中世王朝物語全集(算用数字並びに上・下は巻)、『源氏物語』『狭衣物語』のそれは新編日本古典文学全集(算用数字並びに四角で囲んだそれは分冊番号。『狭衣物語』の算用数字は巻)により、漢数字は該当ページを示す。『古今集』の本文は新日本古典文学大系による。なお、表記の一部を私に改めた個所がある。

注(1) 二人は各々「疎くむつかし」(前左大臣女、「疎くうるさし」(故院の姫宮。以上、1・18)と語られており、これらの叙述からすれば、二人と恋路との夫婦関係は親密であるとは考えにくい。

(2) その他に帝の恋路に対する寵愛は藤壺の視線から「めづらしかりける(帝ノ)大臣(=恋路)の御覚えのやうを、けしからずうち合はず思さるれど」(2・六二)、「(女)二宮ヲ院ニトドメテオキタイ藤壺ニ対シテ、三条院ニ連レテ行コウトスル恋路ノ氣持チヲ汲ンデ、恋路ニ氣遣ッテイル院へもとの帝」(二)めづらかなる人の御覚えなるやと」(2・七八)と語られている。

(3) 既にこの点に関しては、辛島正雄『「いほでしのぶ」の影響作―『恋路ゆかしき大将』と『風に紅葉』と』(『中世王朝物語史論』下巻所収 笠間書院 二〇〇一・9)が指摘している。その他に「右の大臣の女御、承香殿と聞こゆるは、大将にも忍びたる御仲なりける、それも上(=帝)の御みちびきにぞありける」

(『恋路ゆかしき大将』1・19)と「これ(注)梅壺女御が男主人公を恋慕していること)ゆゑつくづくと御里居のやうも(太政大臣北の方ガ男主人公)聞こえ勧め給ふに、『あながちならぬことゆゑ、空恐ろしう』と(男主人公ハ)やすらひ給へど、(北の方ハ)紛らはして導ききこえ給へり」(『風に紅葉』上・二四)、「(男主人公ノ)加行ニヨッテ)宮(=一品宮)の御一人寝を、まめやかに心苦しうおぼして、『なにか苦しからん。童にてのままに、あの(一品宮ノ)御そばに寝給へ』と(男主人公ノ)異母兄ノ遺児デアル若君三)のたまはずれど、『けしからず』と聞き入れ給はぬを、まめやかにまことしう、さまざまのたまひつつ、とかく導き給ふに」(同・下・八六)の傍線部のごとく、両作品は男を女のもとに導くという点においても類似している。さらに、このような例は同時代に成立したと考えられる『とはすがたり』(巻三)において、後深草院が異母弟の「有明の月」(性助法親王)を二条のもとに導くという個所にも見られる。

(4) 『源氏物語』並びに『狭衣物語』に関する記述は、大倉『狭衣物語』―冒頭と巻末、そして〈身代わり〉の独自性―(中野幸一編『平安文学の交響―享受・撰取・翻訳』所収 勉誠出版 二〇二一・5)と一部重なる点のあることを御断わりしておく。

(5) 高野晴代『コレクション日本歌人選『源氏物語の和歌』(笠間書院 二〇二一・7)が既に指摘している。

(6) もう一例は、狭衣の源氏宮に対する会話の中で『「なかなかなる形代をこそ見たまへしか。いでや、されど(源氏宮ヲ)しばし忘るる心は、神もえつけたまはぬわざにや、今少しあやかりやすにぞなりにて侍る』(2・4・三三七)と述べているように、狭衣は宮の姫君を源氏宮の〈形代〉として認識している。

(7) 鈴木泰恵によって、「狭衣の姫君恋慕の特質は、源氏宮恋慕を重ね合わせられるばかりでなく、母君恋慕をも重ね合わせているところにある」(「知のたわむれ―紫」が「紫のゆかり」であるならば『狭衣物語』批評』所収 翰林書房 二〇〇七・5)と指摘されている。

(おおくら ひろし 日本語日本文学科)